

映画と博覧会「満洲国」の文化展示と宣伝

—『皆大歡喜』を事例に—

管新寧（文 中国語中国文学 D2）

1. はじめに

1942年、「満洲国」は建国十周年を迎え、その記念として「満洲建国十周年記念大東亜建設博覧会（以下大東亜建設博覧会と略称）」が開催された。この博覧会は、「満洲国」の理想や発展を象徴するイベントであり、多様なメディアによってその意義が広く伝えられた。『皆大歡喜』は同年、「満洲国」の映画産業である「株式会社満洲映画協会」（以下「満映」と略称）によって製作された劇映画である。この映画は、建国十周年を祝う「国慶映画」として、博覧会の賑わいを描き、祝賀行事を身近に感じさせる内容となっている。本研究では、一次資料に基づいて、新聞や紀行文における博覧会の様相を考察し、映画『皆大歡喜』が博覧会をどのように再構築し、文化展示と宣伝においてどのように作用を果たしたのかを明らかにしたい。

2. 帝国主義的プロパガンダ装置としての博覧会

明治以降、日本は台湾、朝鮮、満洲などの植民地を含む多くの博覧会を開催しており、これらの博覧会はいずれも帝国主義的なプロパガンダ装置として利用された。日本国内開催の博覧会では、満洲は資源供給国として出展した一方で、「満洲国内」で開催された博覧会では、宗主国日本の発達を見せつけ、植民地としての従属的立場でありながら、「新しい満洲」としてその存在の合理性を強調した。¹さらに、太平洋戦争が激化する1942年には、博覧会に「大東亜」という強力な政治的な色合いが加えられた²。

「大東亜建設博覧会」は1942年8月10日~9月30日の52日間に、「康德新聞社」「満洲新聞社」「満洲日日新聞社」の主催、「満洲政府」「関東軍」の後援で行われた。その開催目的は、満洲建国十周年を記念し、建国以来の輝かしい歴史や産業の発展を展示することで日満関係を深め、満洲を大東亜共栄圏の重要な拠点として確立することである³。会場は3つに分かれ、第一会場は戦争成果や日本の軍事力を強調する「大東亜戦争館」や、満洲の歴史・産業を展示する「建国館」、日本の各企業・地区館、満洲各地区の展示館、大東亜共栄圏内各地域の特設館など、政治的な意味合いを持つ展示が展開された。第二会場は、農産館、水産館や林産館などの満洲の各産業が主な展示であった。第三会場は、飛

¹ 山路勝彦「満洲を見せる博覧会」（『関西学院大学社会学部紀要』101号、2006年）、pp.43-67。

² 「大東亜博覧会」（1942年5月30日~6月21日）は「華北宣伝同盟」の主催により北京で開催された。「大東亜戦争博覧会」（1942年11月1日~12月9日）は「南京政府汪政權」の主催により南京で開催された。

³ 「大東亜建設博覧会」（『盛京時報』1942年3月5日）、第1版。

行塔、怪力館、遊技場などの娯楽場所であった⁴。

3. メディア宣伝の中心としての「大東亜戦争館」

展示館の企画は、すべて関東軍報道部の厳格な監督と指導のもとで進められた。鈴木伊吉によれば、第一会場には32の展示館、第二会場には6つの展示館があり、展示館は「白堊の龍宮城」のように並んでいる。特に「大東亜戦争館」は第一会場の中心的な展示館で、軍の直接監督のもと準備が進められ、展示はシンプルで分かりやすく、漫画を多用して理論に頼らず、観客に直接的にメッセージを伝えることが重視された⁵。このような企画方針により、博覧会は「満洲国」の正当性や大東亜共栄圏における位置づけを強調し、軍の思想宣伝を支える文化展示として機能していたことがわかる。

日本及び満洲の新聞や雑誌の紀行文には、大東亜戦争館の人気や展示内容の影響力が詳細に記されている。この展示館では、米英の東アジア侵略の歴史から大東亜戦争の経過と戦果までが報告され、展示は、陸・海・空それぞれの戦利品をはじめ、飛行機の展示装置などが来場者の目を引き、観客に対して力強い印象を与えるよう設計されていた⁶。また、真珠湾攻撃やマレー沖海戦などの場面がパノラマやジオラマで再現され、大規模な壁画や後方支援の様子を描いた展示もあり、写真や模型を通じて戦争の実態を間近に体感できる構成になっていた⁷。

大東亜戦争館に対する反響についても、「満洲国」の皇帝である愛新覚羅溥儀（1906-1967、最後の皇帝）が博覧会を視察した際、予定を大幅に超える時間を費やして大東亜戦争館で展示を鑑賞し、満足の意を示したことが幾度も報じられた⁸。また「満博記」によると、大東亜戦争館は特に満洲人にとって新鮮で、新聞やラジオとは異なる実体験としての臨場感が観客を引きつけ、ジオラマや動く展示の前では観客が感嘆し、歓声を上げて展示に没頭していた。来場者による「優秀展示館」の投票が行われ、大東亜戦争館が圧倒的多数の票を集めて第一位に選ばれたようだ⁹。

以上の資料により、大東亜戦争館が観客の共感と支持を集め、「満洲国」が掲げる大東亜共栄圏の理

⁴ 「大東亜建設博覧会計画概要擬定」（『盛京時報』1942年2月24日）、第2版。渡辺伊勢次『大東亜建設博覧会』（満洲建国十周年記念大東亜建設博覧会事務局、1943年）長春市図書館地方文献デジタル化プラットフォーム。

⁵ 鈴木伊吉「満博記」（『博展』12月号/合併第20号、(76)日本博覧会協会1942年12月）、pp.12-17。

⁶ 敏活「大東亜建設博覧会見学記」（『盛京時報』1942年10月8日）、第四版。

⁷ 西澤捷「満洲建国十周年記念 大東亜建設博覧会を観る」（『博展』12月号/合併第20号、日本博覧会協会1942年）、pp.8-11。

⁸ 「皇帝陛下御臨大東亜建設博覧会」（『盛京時報』1942年9月24日）、第一版。「皇帝陛下本日臨幸大東亜建設博覧会 高橋事務局長感激謹話」（『盛京時報』1942年9月23日）、第五版。

⁹ 鈴木伊吉「満博記」（『博展』12月号/合併第20号、(76)日本博覧会協会1942年12月）、pp.12-17。

念への理解と賛同を促す場として機能していたことがわかる。

4. 博覧会をめぐる映画の表現

映画『皆大歓喜』は、田舎に住む老婦人が都市に住む子供たちに誘われ、一緒に博覧会を訪れるという物語である。監督は王心齋、撮影は福島宏、脚色は八木寛が担当した。この映画は、主に主人公の老婦人の視点を通して博覧会での出来事を描写している。冒頭では、活気あふれる博覧会の入り口が撮影され、観客に場内の賑わいが伝わるよう工夫されている。老婦人と孫が会場に到着すると、彼らはまず「飛行塔」などのアトラクションを楽しみ、その後「米英撃滅遊技場」で遊ぶ息子と合流するシーンが描かれている。さらに、会場内の「林業館」でトラの標本に驚かされる場面や、喧嘩している娘と婿の仲を取り持つシーンなど、登場人物の心情変化を通じて博覧会の多様な面を伝えている。最終的に家族全員が「音楽堂」で演奏を楽しみ、老婦人が子供達家族を夕食に招待する場面で物語は締めくくられる。

映画は娯楽施設が多く集まる第三会場を中心に描写しつつ、チケット販売所や宝くじ売り場など経済面の要素や、満洲の林業館、多目的ホール「音楽堂」など社会的な側面も描いている。しかし、展示の中心であった「大東亜戦争館」や、大東亜共栄圏地区の発展、日本の発達を示す各特設館は描かれていない。『皆大歓喜』は、大東亜建設博覧会の娯乐的な側面を中心に描写し、博覧会の政治性を抑え、観客が娯楽として楽しめる作品に仕上げられたのである。この点は留意すべきである。

5. 映画における対照的な描写－宝くじと歌曲の宣伝について－

『大同報』に掲載された「小彩票購買者擁擠」および「東博小彩票不敷争購、經濟部再増援」の2つの記事によれば、大東亜博覧会事務局が設置した宝くじ売り場は民衆から大変な人気を集めた¹⁰。宝くじは1枚5角で、甲・乙・丙の3組に分かれ、各5万枚が販売された。賞金は、一等が50元、二等が10元、末等が1元とされ、全体の当選率が約20%、すなわち5人に1人が当選する設定だった¹¹。この宝くじ販売は、博覧会で大きな購買熱を生み、用意された宝くじはわずか20日間で完売した。そこで「満洲国經濟部」は追加で25万枚を発行、さらに会場内の儲蓄館に小型の売り場を増設することを決定した。これらの報道から、「満洲国經濟部」と博覧会事務局が宝くじ販売を強力に推奨し、メディアを通じて人々を動員し、広く民衆の関心を集めようとしていたことがわかる。

¹⁰ 「小彩票購買者擁擠」（『大同報』1942年8月13日）、第2版。「東博小彩票不敷争購 經濟部再増援」（『大同報』1942年9月5日）、第2版。（刘楚楚、「1942年“大東亜建設博覧会研究”」（華中師範大学歴史文化学院、2019年）、p67より転載。

¹¹ 「發賣五角小彩票三組計十五萬枚 大東亜博覧會中的新點綴」（『盛京時報』1942年8月7日）、第5版。

一方で、映画『皆大歡喜』における宝くじ購入のエピソードは、現実の宣伝とは異なる視点を提供している。映画の中で、老婦人の息子・克明はかつて競馬に熱中して会社の公金を流用し、その結果、職を失い博覧会内のレストランで働いていた。競馬通いをやめたものの、レストランの客が「宝くじで一等賞の50元が当たった」と話すのを耳にし、衝動的に宝くじを購入するが、結局当選には至らない。この一連の出来事が、克明の感情の変化を通して描かれている。喜々として宝くじを購入する姿、当選を期待して興奮する様子、落選した際の落胆した表情、そして最後に宝くじを破り捨てる手元の特写が、克明が賭博に対する未練を断ち切る決意を象徴している。このシーンは、当局が宝くじの購入を奨励し、民衆を動員して購買を促した宣伝とは対照的である。宝くじ購入に失望を感じさせることで、賭博への批判的な視点を示している。

博覧会の「音楽堂」は、開催初期には主に開会式や閉会式、表彰式などの政治的行事に使用されていたが、8月末に「余興館」と名称が変わり、娯楽施設として改められた。演目には、日本舞踊、満鉄の歌と踊り、歌謡や吹奏楽などが含まれ、中国劇や農家・労働者の表彰式もあり、政治と演芸が融合した場として機能していた¹²。映画『皆大歡喜』でも「音楽堂」が描かれており、人気歌手・虹雁が登場して「建国10周年慶祝歌」を披露するシーンがある。この歌は1942年に「満洲国」建国10周年を祝うために発表されたもので、その歌詞には「大東亜共栄圏」や「新秩序の建設」といった国策宣伝が盛り込まれていた。こうした歌の普及は、無意識のうちに人々の思考に影響を与え、政治的プロパガンダとしての目的を密かに有しているといえる。映画内で視覚・聴覚を通じてこの歌が再現されることで、観客に対して一種のプロパガンダとして機能していたのである。

6. おわりに

大東亜建設博覧会は、「政治・経済・娯楽」の要素を複合的に組み合わせた帝国主義的プロパガンダの場として、満洲の発展や日本の影響力を強調する役割を果たした。博覧会において中心的な役割を果たした「大東亜戦争館」や各産業の展示が、日本の軍事力と「満洲国」の発展を強調する文化展示であり、紀行文や新聞で重点的に宣伝された。それに対して、映画『皆大歡喜』は、娯楽的な場面を強調し、特に第三会場のアトラクションでのシーンを通して観客を魅力した。博覧会を政治的プロパガンダの場とする側面を薄め、祝賀行事に親しみを持たせてより自然に楽しめる形で「満洲国」の理想像を伝えたのである。

¹² 「大東亜博覧會新設餘興館 妙歌晚囀響徹雲霄」（『盛京時報』1942年9月4日）、第2版。「大東亜博覧會連日舉行餘興」（『盛京時報』1942年8月30日）、第5版。